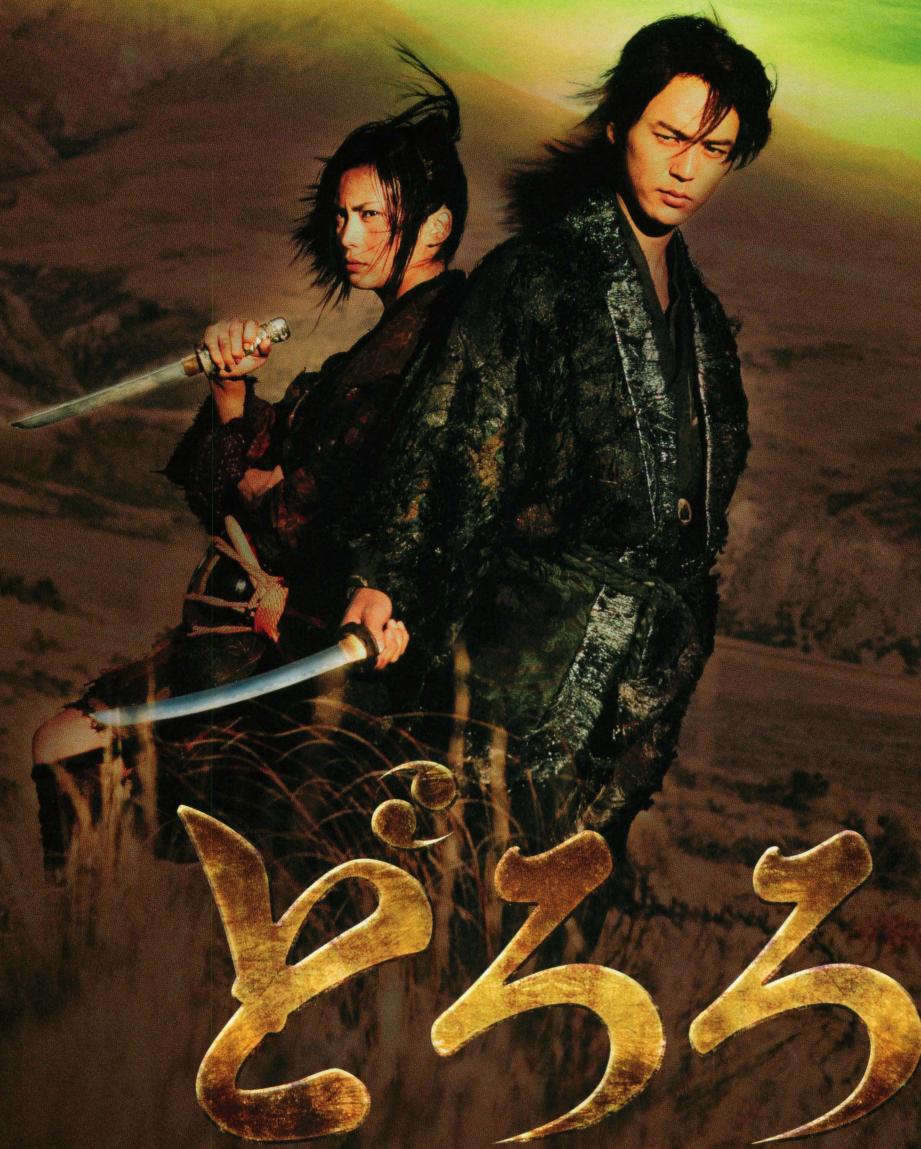


物語が、動き出す。



いま世界の才能が、あの隠された傑作を蘇らせる。

妻夫木 聰 柴咲コウ
瑛太 杉本哲太 麻生久美子 / 土屋アンナ 劇団ひとり
原田美枝子 中村嘉葎雄 原田芳雄 / 中井貴一

原作／手塚治虫 プロデューサー／平野 隆 監督／塩田明彦 アクション監督／チン・シウトン

共同プロデューサー／下田洋行 脚本／NAKA雅 MURA・塩田明彦 音楽プロデューサー／桑波田景信 音楽／安川午朗 福岡ユタカ 衣裳デザイン／黒澤和子 コンセプトデザイン／正子公也
撮影／柴主高秀 脱衣／鹿見山明長 美術監督／丸尾知行 録音／井家真紀夫 VFXプロデューサー／浅野秀二 VFXディレクター／鹿住崩生 編集／深野俊英 スクリプター／杉山昌子

助監督／李相國 アクション指導／下村勇二 特殊造型／百武朋 製作担当／阿久根裕行 山下秀治 ラインプロデューサー／及川義幸 アソシエイトプロデューサー／岡田有正 辻本珠子 原公男

Photographs by Klow Hirota 製作／「どろろ」製作委員会(TBS ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン 電通 MBS 中部日本放送 S-D-P ショウゼンジャパン Yahoo! JAPAN WOWOW RKB毎日放送 北海道放送 朝日新聞社 東京都ASA連合会)

制作プロダクション／ツインズジャパン 配給／東宝 協力／ニュージーランド航空

©2007 映画「どろろ」製作委員会

DOLBY
DIGITAL

www.dororo.jp

父の野望のため体を奪われし者—。時の権力に両親を奪われし者—。 失われた体と心を取り戻すために、今こそ運命に挑め。

遠い昔、いや未来かもしれないある国。終わりの見えない戦国の世を憂う武将・醍醐景光は、戦乱の世を治める力を得るため、自分の子の体48箇所を48体の魔物に差し出す。こうして生まれた百鬼丸は、医師・寿海に仮の体と護身のための妖刀を与えられ、見事な成長を遂げる。やがて、魔物を倒すことに奪われた体の一部を取り戻すことを知った百鬼丸は、魔物退治の孤独な旅に出る。ひょんなことで百鬼丸の存在を知ったコソ泥どろろは、百鬼丸の強さの象徴である妖刀を奪うため、その旅を追いかけ始める…

自らの体を取り戻すため、左腕につながれた妖刀で魔物たちに立ち向かう「百鬼丸」。

自分だけを信じ、破天荒なまでに百鬼丸の妖刀を狙う「どろろ」。

相反する二人の旅の果てには、切り裂くことが出来ない漆黒の闇が広がる。



アジア発、世界へ 映像化不可能といわれた 〈マスターピース〉 偉大なる原作への挑戦。

ジャンル不問の壮大なる一大エンタテインメント

漫画を世界的な文化に押し上げた巨人・手塚治虫原作の隠れた傑作「どろろ」の映画化である。かつて世界的なクリエイターたちがこぞって、映画化を目指していた手塚作品のなかで、映像化が不可能とされこの幻の傑作に、発表から40年の時を経たいま世界の才能が集結。戦国時代という原作の設定を、いつでもない時代、どこでもない場所という神話的な歴史観をベースにして置きかえ、普遍のメッ

セージを、強烈なキャラクターたちを登場させるという構成で現代によみがえらせた。原作がもつワイルドなエンタテインメント性を一氣に凝縮。壮大なスケールとスピード。今までの日本映画の枠では成立しえなかった冒険活劇。「どろろ」の物語に広がる世界観は、アジアから世界に向けた映画作りの挑戦でもある。2007年新春、映画「どろろ」は世代を超えた観客たちのド胆を抜くことになるであろう。

日本映画の枠を超えた最大規模の撮影体制

「どろろ」の映画化。それは、日本映画の既存概念を覆す取り組みでもあった。監督・脚本には、世界の映画祭で高い評価を受ける塩田明彦（「黄泉がえり」「害虫」「この胸いっぱいの愛を」）。また重要な役割を占めるアクション・シーンを担当したのは、「HERO」

「LOVERS」でハリウッドを魅了したチン・シウトンだ。時代設定や場所が、今までの「時代劇」とは一線を画すために、ニュージーランドで大掛かりなロケーションを敢行。全編にわたって壮大な一大絵巻が展開されることになる。

[妻夫木聰×柴咲コウ] 最高のキャスティングが実現

百鬼丸+どろろ=“バディ・ムービー”の柱を担うのは、妻夫木聰と柴咲コウ。日本映画界のみならずアジアで人気を誇る最高の2人が、「俳優としての今までのキャリアのすべてを出す」という意気込みのもと、これまで出演したどの映画・ドラマでも見せたことのない表情とアクションをスクリーンにお見せすることとなる。

さらに、「ヘブン・アンド・アース 天地英雄」に出演し世界的な評価

を受けた中井貴一が宿敵となる醍醐景光を、原田美枝子がその妻・百合を演じ、瑛太、杉本哲太、麻生久美子、土屋アンナ、劇団ひとり、中村嘉葎雄、原田芳雄他、錚々たるメンバーが出演を果たした。「どろろ」が持つ疾走感と独自のパワーに秘められた世界観は、最高の俳優たちによって、誰も見たことのないエンタテインメント映画へと昇華した。

2007年新春——日本は“本物のエンタテインメント”に目覚める。

